



基本理念

病む人に寄り添い、安全かつ最適な医療を提供します



九州医療センターの基本理念

基本理念は2018年10月に職員全員の意見を集約して決定されました。「病む人に寄り添う」とは、常に患者さんに接して苦痛や希望を知り、患者さんの権利を第一に、ご家族や重要な関係者の思いにも耳を傾けて温かい医療を実践する姿勢を表しています。「安全」な医療とは、検査および治療成績とともに当院での成績をもとに十分な説明を行い、患者さんの理解と同意を得て、可能な限り不利益を最小限化して提供する医療です。また「最適な」医療とは、病院の総合力を生かして、いくつもの選択肢の中から患者さんの自己決定権のもとで選ばれた医療を、患者さんと医療者が協議して実践する医療です。

職員は時代の変化と患者さんのニーズに柔軟に対応できるよう日々研鑽し、医療連携を推進し、病院の健全な経営にも積極的に参画し、一丸となって基本理念および運営方針を推進します。

INDEX

- ① 院長退任の挨拶 森田茂樹
- ② 院長就任の挨拶 岩崎浩己
- ③ 退任の挨拶 原田、宮原、矢坂、佐藤、蓮尾、坂本
- ④ 退任・異動の挨拶 肥後、吉本、荒木、花田、佐藤、中元、井上
- ⑤ 新臨床研修医へ贈る言葉 富永、翁、三輪、杉本
- ⑥ さわやかナースング 福重友梨
- ⑦ ヒポクラテスのカフェ 吉住秀之
- ⑧ 食事改善プロジェクト始動 井上聡美



退任のご挨拶

前院長 森田 茂樹

本年3月31日に九州医療センターの院長を退任いたしました。2018年4月からの5年間、とくに後半の3年間はコロナ禍の対応に追われましたが院内外の皆様のご支援のおかげでなんとか任務を全うすることができました。ありがとうございました。

地域の皆様から手を差し伸べていただいた パンデミック1年目

今回のパンデミックでは地域の多くの方々にご支援いただきました。2020年の2月19日に当院に福岡県で最初の感染者が当院に入院されましたが、あっという間にECMOが必要なほど状態が悪化しました。当院ではICUの構造上の問題でECMOが使えなかったのですが、大学病院で患者さんを受け入れていただきました。同年9月に起きたクラスターでは感染が瞬く間に拡大し院内でベッドを確保することができず途方に暮れましたが、市内の複数の施設から手を差し伸べていただき、迅速な患者さんの転院が実現しました。また当時当院だけでは対応しきれなかったPCR検査は福岡市で行っていただきました。このようにパンデミックの初期の段階で地域の方々から助けていただいた経験が、地域でワンチームになって戦うという意識を院内に醸成したと思います。

手を差し伸べる役割を果たせた 一般救急の受け入れ

当院は夜間時間外の救急体制に関しては福岡市内でも最も充実した施設の一つです。パンデミックの大きな波が襲ってくるたびに一般の救急患者が激増するという現象が起こりました。当院の役割として職員には原則的に救急を全て受け入れるように繰り返し指示をだしました。パンデミックの最盛期には1日の救急車の受け入れ件数が40台を超える日もあり、2019年は3732件だった件数が2022年は5961件に達しました。救急の最前線で医師、看護師、医療スタッフの諸君が身を粉にして働いてくれた結果です。

もともと九州医療センターの成り立ちはご存知のように国立福岡中央病院と国立久留米病院の統廃合によってできた病院で

すが、設立のコンセプトは九州大学と久留米大学の精鋭を集めて大学病院に負けない施設をつくるということでありました。その結果、各診療科のレベルはどこの大学病院と比較しても質・量ともに遜色のない水準に達していました。今回のパンデミックで逼迫する救急への対応を求められた副産物として診療科の相互の連携や医療スタッフの機動性が格段に強化されました。退任するにあたって改めて職員の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

看護師の皆さんへの特別な思い

コロナ病棟の看護師さんのチーム編成の方法は二つの選択肢がありました。病院全体の看護師さんから志願制でチームを作るか、陰圧室が設置されている病棟の看護師の皆さんにそのまま担当してもらうかの二つです。当院では感染対策チームが短い期間に万全の準備をしてくれ当該病棟の看護師さんへの研修も十分なされていると考え志願制をとらなくても大丈夫と考えました。しかし翻ってその当時、海外からの報道でコロナの犠牲者の様子が連日のように報道されている状況で、毅然として感染者に寄り添う看護師さんの姿を想像する度にどんなにか私が勇気をもらったことでしょうか。この場をかりて最初にコロナ患者さんを看護してくれた当院の看護師の皆さんに特別の感謝を表明するとともに、福岡地域や全国の医療施設で最初にコロナ患者の診療にあたっていただいた医療従事者の方々に心から感謝したいと思います。皆さんが日本を救ったヒーロー、ヒロインです。ありがとうございました。

最後に

私にとってコロナパンデミックに遭遇したときに地域の職員の皆さんから支えられていることを実感することができました。この時期九州医療センターの院長であったことはある意味幸運であったと思います。私を支えていただいた全ての方々に改めて感謝の意を表明するとともに今後も九州医療センターを引き続きご支援お願いいたします。



院長就任のご挨拶

院長 岩崎 浩己



平素より九州医療センターの運営にご理解とご協力を賜り心より御礼申し上げます。

本年4月より病院長を拝命しました岩崎浩己（いわさきひろみ）と申します。

何よりもまず、前任の森田茂樹名誉院長に感謝の言葉を述べてさせていただきます。森田先生は副院長として2年、病院長として5年、卓越したリーダーシップで私たちを導いてくださいました。2020年2月に福岡県下1例目のCOVID-19患者さんを当院で受け入れてから第8波に至るまでの3年間、本当に難しい舵取りであったと存じます。院内の診療体制はもとより、福岡市ひいては福岡県全体さらに国立病院機構の体制整備に尽力され、他のモデルとなるような施策を講じてこられたことは誰もが知るところです。非常時の危機管理における情報共有の大切さを教えていただきました。救命救急センターの整備、ハイブリッドを含む手術室の増設、リニアック棟の増築など、健全な病院運営のために必要な手立てを次々に繰り出し、当院を国立病院機構140病院のトップランナーに押し上げられました。会議等の場では、職員への思いやりに満ちたフェアなご発言がたいへん印象に残っております。今後は教育の現場でお仕事をされると伺っております。先生の薫陶を受けて、誠実で優

れた医療人が数多く巣立つであろうことを確信しております。九州医療センターでの7年間の激務、本当にお疲れさまでした。

改めまして自己紹介いたします。私は高校・大学の9年間、ラグビー部に所属していました。医学部6年生最後の大会（九州山口医科学生体育大会）は主管校として地元福岡で開催しましたが、そこで優勝できたことが学生時代最高の思い出です。1990年に九州大学を卒業し、血液内科医を目指しました。急性白血病や悪性リンパ腫など、短期間で生命を脅かす重篤な状態となる患者さんを診療しますので、内科のなかではかなりハードな診療科だと思います。患者さんと一緒に病氣と闘って、つらい治療を乗り越えた先には、治癒というこの上ないご褒美が待っている。年を取る毎にこんな素晴らしい体験を重ねていけることが血液内科の醍醐味だと思っています。2000年からの5年間は米国留学させていただきました。アメリカ同時多発テロ、いわゆる9.11を現地で体験し、深い悲しみと怒りが入り混じる過去に経験したことのない動揺を覚えました。それでも前を向いて復興に突き進んでいく人びとの営みを間近で見ることができたことは、人生の大きな糧になったと思います。2016年4月に九州医療センターに入職し8年目の今、院長という大きな仕事をいただき身の引き締まる思いであります。

福岡市は少子高齢化のなかでも成長し続けている全国でも希有な都市です。

この元気な街「ふくおか」を医療の面で支え、地域の皆さまに安心をお届けすることが九州医療センターの使命と考えています。

基本理念「病む人に寄り添い、安全かつ最適な医療を提供します」に謳う「寄り添う医療」とは、身体的にも精神的にも苦痛に直面しておられる患者さんとご家族に、文字どおり寄り添って安らぎを与えるということです。さらには、職種間の隔たりなく職員同士が支え合うことで、ほっとする優しさと温もりに満ちた空気をそこかしこで感じられる病院でありたいと思います。緊張したり不安を感じたりする場面の多い高度急性期病院ですので、一人ひとりが寄り添う気持ちで接することが何より大切と考えて

います。心かよう信頼関係のもとではじめて、最新・最適の医療を提供できるはずですが、この方針は、院内に留まらず地域連携の場面でもしっかりと実践してまいります。地域の皆さまに九州医療センターのイメージは？と伺ったときに、「最先端」と同じくらい「優しさ」「温もり」という言葉を挙げていただければ嬉しく思います。まだ至らないところもあると思いますが、この志をしっかりと根づかせて継承してまいります。引き続き、九州医療センターを何卒よろしく願いいたします。



皆様に心から感謝！

前看護部長 原田 久美子

令和5年3月末日をもって退任することになりました。昭和59年4月に国立長崎中央病院に就職してから、看護師として39年の間、多くの皆様到大変お世話になりました。

私と九州医療センターとの出会いは、平成6年4月、当院の前身である国立福岡中央病院に看護師長として赴任した時です。その当時、7月の当院オープンまでは担当の病棟がなく、新病院の準備に関わりました。百道に聳え立つ大きな病院の前に立ち、足がすくんだこと、オープン前に病院内に出入りし、ピカピカの室内で、各病棟の物品や職員の動線の確認、新たな診療科のマニュアル作成など、職員全員で対応したこと、今でも鮮明に記憶に残っています。ここで、諸先輩の皆様にご指導いただきながら、看護管理者として歩ませていただきました。当院で9年お世話になった後、8回転勤し、臨床、行政の看護管理者として活動いたしました。この間もたくさんの方々にご支援いただき感謝にたえません。

そして、令和2年4月、看護部長として当院に戻ってきました。ちょうど、新型コロナウイルス感染症が感染拡大し始めた頃です。毎日、会議にて患者受け入れ対応、看護体制、感染対策等、最善策を議論し、職員へ周知し、職員全員でこの大きな試練に立ち向かう状況でした。コロナ専用病棟の看護師たちは、厳しい現状と知りつつ、どのような状況下でも“患者に寄り添う”ことを忘れず、真摯に患者さんに対応してくれました。また、その他の部署の看護師たちも、専用病棟に入っての支援や、全部署で全診療科の患者に寄り添ってくれました。彼ら、彼女らの患者さんに寄り添う姿勢は、看護部長として誇りに思います。

また、この3年、コロナの感染状況を見ながら、看護の質向上を目指し、ケアの見直し、人材育成、業務改善、倫理観の醸成など様々な活動を、看護師長をリーダーに副看護師長やスタッフが取り組んでくれたことにも感謝です。皆さんの力は着実に患者さんの看護に表れてきています。

九州医療センターでの勤務は、皆さんとの出会いがあり、職員が一丸となり困難を乗り越えてきたこと、本当に思い出深き3年間となりました。共に過ごした皆様に感謝です。

最後に、九州医療センターの益々のご発展をお祈りいたします。本当にありがとうございました。



25年間ありがとうございました

前副院長/整形外科・リウマチ科 宮原 寿明

1998年4月に九大から赴任して以来、実に25年間の長きに渡り当院に在籍させていただきましたが、2023年3月末日をもちまして退任いたすことになりました。これまでの皆様のご協力に深く感謝するとともに厚く御礼申し上げます。関節外科、関節リウマチを専門とする私と脊椎外科の寺田院長が赴任して以来、皆様のご協力が高難度関節外科・脊椎外科の手術実績等により全国的にもかなりの評価を得ることができました。また「リウマチ科」も標榜し、高難易度の関節リウマチ手術に加えて、生物学的製剤・JAK阻害薬をはじめとする最新の薬物療法を実施するとともに、膠原病内科との密接な協力体制により、関節・関節外病変のトータルマネジメントが可能な数少ない施設として全国から注目を浴びるまでになりました。2013年から6年間は日本リウマチ学会理事、九州・沖縄支部長も務めさせていただきました。2019年4月からは私の後任として福士純一先生が整形外科・リウマチ科の運営を引き継いでいております。引き続きご支援の程よろしく願いいたします。また2014年4月から2019年12月まで副院長を務めさせていただきました。副院長退任直後にコロナ禍が発生しましたが、2020年1月以降はシニア医師として残留させていただきました。整形外科・リウマチ科診療にあたらせていただきました。院長先生をはじめ、皆様に感謝申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健勝とますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



チーム医療とシャンパンボトルネックサイン

前脳血管・神経内科医長・臨床研究推進部長 矢坂 正弘

大阪から福岡へ平成17年（2005年）に異動し18年が経過した。大阪から福岡への引っ越しの直前3月20日に、福岡県北西沖の玄海灘を震源とする福岡県西方沖地震（最大深度6弱）が地震の少ない福岡で起こり驚いたことや転居後大きな余震に見舞われたことを思い出す。百道浜の路面が波打ったりマンホールが飛び出した状態を目の当たりにし、液状化現象が起きたのだと知った。そんな慌ただしい中で福岡での生活がスタートした。当院脳卒中センターでは脳血管・神経内科、脳神経外科、放射線科、リハビリ、生理機能検査室、栄養部門、薬剤部、看護部が一人の患者の診療にかかわるチーム医療が実践されており大変新鮮だった。毎朝カンファレンスが開かれ、前日入院患者さんの紹介と病態や治療方針の討議が熱心に行われ多くを学んだ。脳血管内科医の診る機会が少ない「もやもや病」の患者さんも脳外科診療部門の下、たくさんの症例を経験した。「もやもや病」の病期3期以降の症例の多くで内頸動脈起始部の狭小化を観察し、「シャンパンボトルネックサイン」と命名し（岡田靖副院長案）報告した。現在では「もやもや病」の頸部血管エコースクリーニング検査所見として活用されている。若いスタッフやレジデントの皆さんと診療や研究を恵まれた環境で行えたことに深謝する。令和5年4月からは南区の「福岡脳神経外科病院」で、脳血管センターで学んだチーム医療を実践し、脳卒中診療の向上に寄与したい。





退任のご挨拶

前小児科科長 佐藤 和夫

23年間の九州医療センターでの勤務でした。無事に定年で退任できることを有り難く思っています。

2000年4月、唐人町の福岡市立こども病院から「周産期医療の芽を育てるために」当院へ赴任しました。産科のある病院で働くことで、「生まれる前から母児に関われること、健康な新生児を健診できること」は、私にとって新鮮でとても楽しく感じました。3床だったNICU（加算）を9床まで増床し看護スタッフも充実、福岡県の地域周産期母子医療センターに指定されました。看護・助産スタッフも含め、気軽に話しあえる周産期センターです。“産科と小児科の連携の良さ”は他の手本となると自負しています。

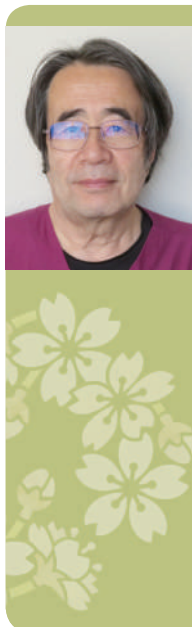
NICU面会時間の拡大、カンガルーケア、同窓会の開催、健常新生児の分娩室での抱っこ（早期母子接触）、母乳育児の推進（WHO/UNICEFの赤ちゃんにやさしい病院に認定）、等 赤ちゃんにご家族の支援を進めてきました。“家族にやさしい周産期センター”の理念は大切に守ってもらいたいと願っています。

お互いに補完する関係であったこども病院が移転し周辺小児医療施設の状況の変化で、一般小児診療の需要（特に救急搬送）が増しました。福岡都市圏での役割を踏まえて、新病院に向けて小児センターの充実が進むことを期待しています。

定年後は、毎日医療的ケア児の訪問診療を行います。当院でもフォローアップ外来を継続します。シニアを温かく見守って下さいね。

いっしょに働いてくださった全ての方に心から感謝いたします。

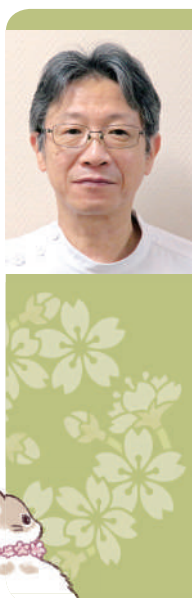
皆さん、ありがとうございました！



23年間を振り返って

前産婦人科医長・ゲノム診療部部長 蓮尾 泰之

2000年に当院赴任した時は、最初は2－3年久保先生を手伝ってこいと教授に言われてやってきました、それが都合23年も勤めることになりました。最初は国立病院の時代です。当時は産婦人科医も5人で毎月6－7回の当直と6－7回の待機がノルマでした（通算すると1年のうち2ヶ月以上病院に泊まっている計算です）。その上、完全主治医制で分業（いまで言うタスクシェア）が全く成されてなく、前の職場に比べて全てを自分でしなければならぬ非常に働き難い職場でした。夜中や休日に術後の患者さんが痛いと言ってます的な電話が何度もかかって来て、その都度当直の先生に電話をして対応を頼んだりしていました。そこで、プロトコルやパスをいくつも作り、治療の均一化を図り、夜間休日は基本当直医が対応する事を申し合わせて仕事の効率化を行い、仕事し易くしました。その後は産婦人科の仕事だけではなく、緩和ケアチーム長（最初は看護師の甲斐さん二人三脚のような状態でした）として緩和ケア外来の立ち上げや緩和ケア研修会の企画などをしてきました。最近では医療情報管理士の岩橋さんの協力を得て、がんゲノム診療連携病院の認定を取り付け、それを機会にゲノム診療部を立ち上げ、がん遺伝子パネル検査の二次的所見への対応や遺伝性腫瘍HBOCの院内対応フローの作成などをしてきました。いろいろ出来たのも病院のいろいろな部署の方のお陰と感謝しています。思えば23年間もの長い間お世話になりました。しばらくは非常勤で働かせて頂きます。今後ともよろしくお願い致します。



23年間ありがとうございました

前泌尿器科科長・前立腺癌総合治療センター部長
坂本 直孝

2000年4月より23年間の長期にわたり、九州医療センターにお世話になりました。

微力ながら尿路性器癌診療を中心に尽力してきましたつもりです。就任当初は研修医、レジデント 含めて4名の小所帯でしたが、現在はレジデント 含め7名に増員され、手術症例も赴任時の2倍以上に増えていきます。病院の特性上、合併症の多いリスクな患者さんも多く、他科の先生方には多くのコンサルトにて適切なアドバイスをいただき、また、連携先の先生方には多くの経過観察などをお引き受けいただき、ありがとうございました。また、多くの医療スタッフの方にサポートいただいたことに感謝いたします。激務の九州医療センターにおいて、自身の気力体力のやや低下を感じ、後進の十分な成長もあり、当方は引き際かなと感じ、この度、退職させていただきました。

泌尿器科も他科と同様、ロボット手術や内視鏡手術など低侵襲化に進んでいます。しかしながら、高難易度症例に対する開腹術を含めた手術を要する症例もあることは事実であり、このような症例に対する治療が九州医療センターに要求され続けると思います。あらゆる診療科とのコラボレーションが可能である施設として対応可能だと思いますので、今後も九州医療センター泌尿器科のサポートをよろしくお願いいたします。

簡単ですが、これまでに関わりのあった全ての方に御礼申し上げます。





退任のご挨拶

前循環器センター 統括運営部長 肥後 太基

このたび九州医療センターでの職を辞し、医師人生残りの期間を在宅診療に挑戦することといたしましたのでご報告とご挨拶を申し上げます。2021年4月に赴任し、まず目指したのが院内の他診療科から信頼され、地域から信頼される循環器内科でした。その取り組みは十分ではなかったかもしれませんが、院内他診療科や地域の先生方から多くの患者様のご相談・ご紹介をいただき、診療科や医療機関間の垣根を低くすることはある程度できたように思います。また、心臓外科との連携によって特に若いスタッフ達がV-A ECMOやImpellaといった補助循環装置も自信をもって管理できるようになるとともに、経カテーテル大動脈弁置換術への道筋もつけることができました。また、今年度は大学病院以外では全国で唯一、脳卒中・心臓病等総合支援センターモデル事業に採択され、県全体の循環器病対策を考えていく貴重な機会もいただきました。今回、理想のリーダー論を胸に組織を発展させようとしていた一方で、短期間での退任に、批判もいただきましたが、一方で、それ以上に多くのあたたかい励ましのお言葉をいただきました。まずは、より在宅診療が普及している東京の地で経験を積み、それを福岡の地で実践し、福岡でのよりよい医療の普及に貢献できればと思っています。今後も立場は変われども皆様とともに挑戦を続けていくつもりです。2年間どうもありがとうございました。



異動のご挨拶

前消化器内科医長 吉本 剛志

医師として12年目の2006年にレジデントとして当院に赴任し以後17年間消化器内科に勤務しました。肝臓専門医としてさまざまな肝疾患治療に携わってきましたが、当時はB型肝炎、C型肝炎の患者さまが非常に多く、外来・入院ともに大変だったことを思い出します。特にC型肝炎はインターフェロン治療の効果が低く難渋していましたが、治療率が非常に高いDAA製剤へと移行し多くの患者さまを治療することができ感慨深いです。また院内、院外より肝障害・肝腫瘍でたくさんご紹介をいただき、ときにはまれな疾患を診ることができ、とてもよい経験を積ませていただきありがとうございました。これまで他科の先生方、コメディカルの方々にはさまざまな場面で助けていただきました。この場をお借りし皆様に感謝申し上げます。長い間お世話になりました。



「総合力」の本当の意味を感じて

前企画課長 荒木 寛崇

私は管理課長として2年、企画課長として1年を当院で勤務させていただきました。赴任した2020年は、未知の感染症対応に病院全体が緊迫した雰囲気にも包まれていました。次々に発生する新たな問題に対し真摯な議論が交わされ、試行錯誤しながら一つひとつ対応策を決定して実行されていたことが思い出されます。一方、3年目は企画課長という立場から、経営の視点で病院全体を見渡す機会を得ました。当院は院長の号令のもとで補助金に頼らない経営を掲げて医業収支黒字化の取組を続けてきました。新型コロナの蔓延で患者の受診行動が抑制され、医療業界全体が補助金に頼った経営を余儀なくされる中、当院は限られた人的・物的資源のもとで一般救急患者の受入を続けてきました。そのことが救急隊からの信頼となり、地域住民の信頼となって患者数の増加をもたらしました。令和5年2月時点で医業収支の黒字額は、国立病院機構140病院で第2位となり、極めて大きなインパクトを与えています。私は、この輝かしい結果の源泉が当院のどこにあるのかを考えてみました。よく当院の強みは「総合力」だと言われますが、その本当の意味は、新型コロナへの対応で見せたように、さまざまな問題に直面した際に病院全体で真摯な議論を尽くし、試行錯誤の末に到達したノウハウをしっかりと蓄積していること、そしてそのノウハウをしっかりと継承していくことにあるのではないかと感じます。そのような九州医療センターに勤務したことを誇りにして、新たな職場へ向かいます。本当にありがとうございました。





転任のご挨拶

前副薬剤部長 花田 聖典

この度、琉球病院へ薬剤科長として異動になりました。私にとって九州医療センターは、入職当時からずっと目標にしていた病院の一つであったので、着任した際のワクワクとドキドキが重なった思いを今でもはっきり覚えています。ところが実際は自分の実力のなさを痛感し、副薬剤部長としての使命を全うできず悔しい思いも多かったですが、病院幹部の方々を始め、九州医療センターのスタッフ皆様からのご理解とご支援をいただきながら頑張ることができました。一方、熊本の自宅から新幹線と在来線を利用した往復4時間以上の通勤を2年間続けてきて体力的にも辛い面がありましたが、我が子の顔を毎日見られることが最高の癒しでした。次は単身赴任生活になりますが、九州医療センターで得た経験を生かして一層精進してまいります。成長させていただいた2年間、誠にありがとうございました。



異動のご挨拶

前副臨床検査技師長 佐藤 圭

この度、西別府病院へ異動することになりました。九州医療センターには2年間お世話になりました。九州医療センターでの赴任中は、医療安全、災害対策、勤務環境改善、タスクシフト・シェアと非常に多くのことに取り組むことができ、皆様と一緒に取り組み、考え、実行できたことは本当に貴重な経験であったと思います。お世話になった皆様には誠に感謝申し上げます。また、コロナ禍ということで検査部門とICTとの連携でも大変お世話になりました。ありがとうございました。短い間ではありましたが濃厚で充実したあという間の2年間でありました。この施設での勤務経験を新任地でも活かして頑張りたいと思います。

最後になりますが、職員の皆様と九州医療センターの益々のご発展を祈念して異動の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



異動のご挨拶

前副看護部長 中元 めぐみ

このたび、国立病院機構本部に出向になりました。2020年に赴任し3年間勤務させて頂きました。毎朝、ふれあい橋の上からみえるPayPayドーム、壮大な九州医療センターを見ながら身が引き締まる思いで、気持ちを新たに通勤していました。

この3年間は、新型コロナウイルスの対応が中心となりましたが、隔離下でPPEを装着しての看護、オンライン面会における家族看護、看取りなど看護師一人ひとりが常に「患者さんに寄り添う気持ち」を大切にしようとする姿はとても誇りに思いました。看護師たちにとっては、それは特別な看護ではなく、看護の本質は変わらないこと、そして何より充実感を感じていたことは、私にとっては大変嬉しいことでした。

また、これまで特定行為研修立ち上げや様々な節目に関わることができ、ご支援頂きました皆様に感謝申し上げます。これからの九州医療センターの益々の発展と皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



異動のご挨拶

前栄養管理室長 井上 聡美

この度、熊本医療センターへ異動となりました。九州医療センターには2019年4月に赴任し4年間勤務させて頂きました。急性期病院での仕事が務まるだろうかという不安の中、とにかく自分にやれることを精一杯頑張ろうと決意して臨んだ日のことが思い出されます。

2020年、予期せぬ新型コロナウイルス感染症蔓延という事態が発生し、コロナ対策本部の方々の大変なご苦労と職員一丸となって乗り越えてきたこの経験はこの先も忘れることがないでしょう。皆様には、栄養管理室の役割であるコロナ感染拡大防止のための食事提供、長年続いた給食委託業者の変更、管理栄養士のチーム医療への参画など、様々な場面でたくさんのご協力とご支援をいただき心より感謝申し上げます。

九州医療センターでのこの貴重な経験を、新天地でも活かしていきたいと思います。

最後に職員皆様のご健勝と九州医療センターの益々のご発展を祈念して異動の挨拶とさせていただきます。



新臨床研修医へ贈る言葉

臨床教育研修センター長 富永 光裕



この春、医師国家試験に合格され、当院で医師としての第一歩を踏み出される皆様にお祝いを申し上げます。これからの初期研修の2年間は、医師・社会人としての人格を涵養し、基本診療の能力と医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）を培う重要な2年間です。コロナ禍ではありましたが、新しく加わった一般外来研修や在宅医療研修も定着し、またEPOC2によるオンライン臨床教育評価も当センターの厳重な研修管理があって初めて有効なものとなることが判ってきました。将来自分が目指す医師像を描きながら、最後までモチベーションを維持して、積極的に初期臨床研修に取り組まれてください。成長されていく姿は当センターの活力でもあり、無事に2年間の研修を修了され、笑顔で次のステップへ進まれるように皆様をサポートします。

新研修医の皆さん
当院への入職おめでとうございます



翁 安

新研修医の皆さん、
医師国家試験合格おめでとうございます！
ようこそ九州医療センターへ！



三輪 浩己

新研修医の皆さん、国家試験合格ならびにご就職おめでとうございます



杉本 愛沙

ただでさえ大変な6年間の学生生活に加えてコロナ禍に巻き込まれた中、国家試験合格おめでとうございます。医師として、新社会人として一歩を踏み出す皆様ですが、研修医としての2年間は不安で一杯だと思います。しかしながら当院では、尊敬できる先生方、先輩たち、沢山の同期たちを始めとした様々な人との関わりの中で、座学だけでは分からない様々なことを身につけることができます。手技・手術に明け暮れるもよし、貪欲に知識を蓄えるもよし、様々な人と楽しい時間を過ごすもよし。自分にあったやり方でこの最高の環境を最大限に活用してください。最後になりますが、刺激に満ちた2年間が始まる皆様の大いなる飛躍を心からお祈り申し上げるとともに、将来皆様とどこかでともに仕事をできることを楽しみにしています。



国家試験の合格、九州医療センターへの入職おめでとうございます。私たちや皆さんは、コロナ禍で臨床実習を十分にできなかった人が多いかと思います。しかしながら、皆さんは入職してすぐに臨床の出なければなりません。最初は不安だとは思いますが、上級医や他の医療スタッフ、患者さんから多くのことを学んでください。そうすれば自然と臨床の力がつき、自信に繋がると思います。当院は幅広い診療科があるため、学ぶことは尽きないはずです。また、他の病院と比べて自分の時間が割と多く取れます。その特色を活かして、2年間という短い研修生活を有意義に使ってください。たくさんの同期とともに切磋琢磨し、立派な医師へと成長することを願っています。



国家試験合格、そして九州医療センターへの入職おめでとうございます。

新社会人として、そして医師としての第一歩ですね。希望や期待と同時に不安も多いことと思います。わからないこと、疑問に思うことは積極的に先生方や研修医の先輩方に聞いて、たくさん頼ってください。優しい先生・先輩が多いので、医学的な相談以外にも個人的な相談や悩み、進路についてなど答えてくださると思います。また同期が多いこともこの病院の強みです。私自身、たくさんの仲間と笑いあい支えあいながら、時には切磋琢磨し、有意義な研修医生活を送ることができました。この研修2年間の経験が今後の医師人生に役立つよう、そして理想の医師像に近づけるよう頑張ってください。皆さんにとって、楽しく実りのある2年間となることを心よりお祈り申し上げます。



特定看護師が誕生しました！！

特定行為研修第1期生が修了！！

2022年度九州医療センター看護師の特定行為研修は6月に開講し、9ヶ月の研修期間を経て、2月28日に特定行為研修第1期生3名が修了式を迎えることが出来ました。当院では特定行為研修を修了した看護師のことを『特定看護師』と名称します。



特定看護師が特定行為を行うメリット

医療の高度化・複雑化が進み、チーム医療の推進が必要とされる中で、特定看護師への大きな期待があります。特定看護師は、特定行為研修で医学的知識・技術を強化した上で、病態の変化や疾患、患者の背景等を包括的にアセスメント・判断し、看護を基盤に、特定行為も含めた質の高い医療・看護を効率的に提供することができます。特定行為の実践では特定行為のみに目が向きがちですが、その行為が看護の延長線上にあり、患者の生活背景を捉えて実施することが特定看護師が特定行為を行うことのメリットです。

特定看護師への期待

【当院の特定行為研修の行為内容の一部】



経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブの位置の調整

直接動脈穿刺法による採血、橈骨動脈ラインの確保



褥瘡又は慢性創傷の治療における血流のない壊死組織の除去



中心静脈カテーテルの抜去



臨地実習では救命救急センター・ICU、消化器センター（消化管）、手術室で各診療科の医師や診療看護師に直接指導を受け、特定行為の症例を経験することができました。症例を経験し知識・技術の修得をするだけでなく、特定看護師が手順書に沿ってどのようなアセスメントをし、特定行為を行うのか、実習を通して医師や看護師、多職種が知るきっかけとなる事ができました。

実習場所の看護師より、「**患者の人工呼吸器の設定について分からない事が聞けた**」、「**受け持ち患者の術後のフィジカルアセスメントと一緒に実施でき安心して看れた**」、「**重症度の高い患者が多く、何かあった時にすぐに聞ける、一緒に対応してくれるため心強い**」等の意見がありました。

特定看護師が増加し、各病棟に1名ずつから最終的には各勤務帯に1名ずつ配置されることで、継続的に質の高い医療・看護を効率的に提供することが可能となります。まずは、特定行為研修担当者として第1期生の活動の支援をすることで、特定看護師がいきいきと活動している姿をみせることで、研修受講者の拡大へ繋げたいです。

特定看護師としての意気込み！！

チーム医療のキーパーソンとなれるよう、日々精進します！



質の高い医療の提供に貢献できるよう頑張ります！

これから実践を積み重ね、安心して任せてもらえるよう頑張ります！

今後、特定看護師の3名はそれぞれの部署を拠点とし、院内で活動を行います。医師や看護師、多職種と協働しながら患者にとって、最善の治療・看護が提供できるようにチーム医療のキーパーソンとして活動していきます。

病棟看護師から気軽に相談を受け、質の高い医療・看護の提供に繋がれるよう、**特定看護師**をぜひ活用してください！！



ヒポクラテスのカフェ

“食物連鎖：ソーセージの話”

NHO 都城医療センター 吉住 秀之

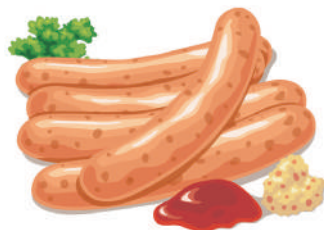
また昔知っていたカンシュタットの火夫は豚肉の腸詰めを十二も続けざまに食べることができ、それで、賭に勝った。

(ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』)

英語のsausageは、ラテン語のsalsus（塩漬けにした）に由来することからも分かるように、鳥獣類のひき肉に塩と香辛料を加え、腸に詰め保存食としたものです。細菌の繁殖を抑えるために塩を添加するのですが、それでも繁殖する細菌はいるもので、ヨーロッパでは古くからソーセージ中毒として知られていた食中毒がありました。この症状を最初に詳細に記述したのは、ソーセージの本場ドイツのビュッテンベルクの医師ユスティヌス・ケルナー（1786-1862）でした。彼は、葬式の会食で供された燻製ソーセージを食べて発生した食中毒患者76人について報告しています。1817年の症例報告からその原因が嫌気性菌の産生する毒素によるものと判明したのは80年後のことで、コッホの弟子エミール・ヴァン・エルメンゲム（1851-1922）の功績です。彼はその細菌を、ソーセージ（botulus）にちなんでバチルス・ボツリヌスと呼びましたが、その後現在使われている呼称のクロストリジウム・ボツリヌム*Clostridium botulinum*に変わりました。その当時は致死率の高い食中毒だったと思いますが、それでもソーセージというソウルフードが廃れることはありませんでした。日本人が河豚を食べ続けたのと似たり寄ったりでしょうか。

嫌気的環境で増殖する菌であることもあり、20世紀初頭に缶詰の生産が増加したアメリカでこの恐るべき食中毒の発生が急増しました。これを契機に研究がさらに進み、ボツリヌス毒素が神経筋接合部でアセチルコリンの放出を阻害することが1949年に解明されました。なごらく西洋での食中毒とされていたが、1951年に北海道岩内では“いずし”によるボツリヌスE型菌の食中毒が本邦で初めて報告されます。極めて少量の毒素で食中毒が発生するののかという疑問から研究を進め、最終的に摂取した毒素の一部のペプチド結合が切断されることで毒素活性が著増するという活性化現象を世界に先駆けて発見したのは、北海道大学の坂口玄二博士（1927-2011）でした。当時極めて危険な細菌の研究であったことから、万一研究室から発病者が出たときには責任をとるために、いつも辞表を机の引き出しに入れていたそうです。日本ではボツリヌス菌の繁殖抑制のためにソーセージには亜硝酸ナトリウムの添加が義務づけられています。最近では蜂蜜に混入する芽胞による乳児のボツリヌス中毒が警告されています。

中毒機序の解明の一方で第二次世界大戦が勃発するとこの毒素は兵器として着目され、悪名高いアメリカ陸軍の医学研究所フォート・デトリック（当時はキャンプ・デトリック）では、毒素の抽出・濃縮・結晶化が進められたという黒歴史もあります。現在毒素の筋弛緩作用の特性を活かして薬物として臨床応用されており、眼瞼痙攣、痙性斜頸、脳卒中後の痙縮からいわゆる「皺とり」などの美容目的まで多様な病状に使われています。使い方一つで毒にも薬にもなるという好例です。先述のケルナーのことを調べたときに、こうした臨床応用の可能性を彼がすでに示唆していたことを知って、その炯眼に驚かされました。



九州医療センター 食事改善プロジェクト始動

～もっともっと美味しくな～れ！病院食！！～

病院における食事は治療の一環であり、入院中の楽しみの一つでもあります。四季折々の行事食、調理師おすすめメニュー、新メニュー、行事に合わせ手作りメッセージカードを添えるなど、工夫を凝らした食事の提供を心がけています。病院食は病態に応じ100種以上あり、病態による制約と限られた予算の中での献立は複雑で、1食500食以上の食事提供は秒単位での作業工程となっています。

しかし、院内患者満足度調査の食事における評価は例年低く、栄養管理室の目標の一つとして「患者食事満足度の向上」を取り組んできました。そんな中、森田院長より「ホテル日航福岡のシェフにアドバイスをいただき、病院食改善に繋げてはどうだろう。」とお声掛けをいただき、早速、院長、栄養管理室長、副室長で中橋名誉総料理長（以下シェフ）を訪ね、今回

前栄養管理室長 井上聡美
(現 NHO熊本医療センター
栄養管理室長)

の経緯、食事提供の現状と食事に対する想いをお伝えしました。シェフからはホテルにおけるサービスについてお話いただき、病院と共通するものを感じました。貴ホテルは、シェフの長年の夢である自家農園を併設し、地場で採れた旬の野菜をお客様に提供するなど食に対する想いを大切にされています。

シェフの承諾を得て、12月からプロジェクトを始動し、季節感、適温での提供を目指した調理、野菜の下味、魚料理とソース、肉をやわらかく提供する方法などご教授いただいています。シェフのお人柄、食に対する想いなど会話の中にもたくさんの学びがあり、スタッフのモチベーションアップにも繋がっています。

●九州医療センター厨房にて



ホテル日航福岡
中橋名誉総料理長

このご縁を機に、更なる改善に取り組み、多部門の協力を得ながら、九州医療センター一丸となって、多くの患者さんに喜んでいただける食事の提供に努めてまいります。



医療職（一）

就任	循環器センター部長	井上修二郎	退任	院長	森田 茂樹
	麻酔科医長	辛島 裕士		臨床研究推進部長	矢坂 正弘
	膠原病内科医師	増田 徹		循環器センター部長	肥後 太基
	血液内科医師	中尾 文彦		小児科医長	佐藤 和夫
	脳血管・神経内科医師	木村 俊介		歯科・口腔外科医長	吉川 博政
	消化器内科医師	國府島庸之		婦人科医長	蓮尾 泰之
	小児科医師	慶田 裕美		泌尿器科医長	坂本 直孝
	小児科医師	東 加奈子		膠原病内科医師	岩永 智陽
	精神科医師	田中 裕記		消化器科医師	吉本 剛志
	消化管外科医師	久松 雄一		精神科医師	谷口 達哉
	消化管外科医師	藤岡 雄介		放射線科医師	久貝美由紀
	脳血管内治療科医師	奥田 智裕		消化管外科医師	津田 康雄
	脳神経外科医師	後藤 克宏		肝胆脾外科医師	内野 馨博
	脳神経外科医師	福田 峻一		脳血管内治療科医師	原 健太
	心臓外科医師	角 裕一郎		心臓血管外科医師	藤本 智子
	血管外科医師	古山 正		血管外科医師	井上健太郎
	血管外科医師	松原 裕		血管外科医師	吉野伸一郎
	整形外科医師	田丸 哲弥		整形外科医師	太田 昌成
	整形外科医師	木村 敦		泌尿器科医師	岡田 達憲
	整形外科医師	緒方 亜紀		産科医師	田浦裕三子
	泌尿器科医師	平井 良樹		産科医師	前原 佳奈
	泌尿器科医師	貝通丸雅士		麻酔科医師	井ノ上有香
	産科・婦人科医師	田中 大智		麻酔科医師	仁田畑和紀

医療職（一）

就任	産科・婦人科医師	中並 弥生	退任	麻酔科医師	小野 悦子
	麻酔科医師	坂田いつか		麻酔科医師	吉野 裕子
	麻酔科医師	松岡 友香		麻酔科医師	岩松有希子
	麻酔科医師	松下 克之		麻酔科医師	井村 一也
	救命救急科医師	成田 純任		救命救急科医師	林 哲也
	救命救急科医師	川原 加苗		脳神経外科医師	宮松雄一郎
	病理診断科医師	藤田 綾		小児科医師	曳野 俊治
				脳神経外科医師	宮崎 貴大

医療職（二）

就任	副薬剤部長	藤瀬 陽子	退任	副薬剤部長	花田 聖典
	副臨床検査技師長	松尾 龍志		副臨床検査技師長	佐藤 圭
	栄養管理室長	春田 典子		栄養管理室長	井上 聡美

医療職（三）

就任	看護部長	西山ゆかり	退任	看護部長	原田久美子
	副看護部長	筒井三記子		副看護部長	中元めぐみ
	看護師長	三好 史恵		看護師長	木下 悦子
	看護師長	岡野 祐也		看護師長	小野 菊世
	看護師長	松田 陽平			

事務職

就任	管理課長	岩崎 吉洋	退任	企画課長	荒木 寛崇
	庶務班長	金城 宏和		庶務班長	横山 鉄平
	専門職	谷口秀二郎			

編集後記

今回の表紙は編集委員の梶原紀子さんがペイペイドームの宮崎ガーデンから撮ってくれた写真をアレンジしたものです。アレンジする前の写真もとてもきれいでした。一度見に行かれるとよいと思います。

副編集委員長 占部 和敬

春だけ舞鶴経由に通勤ルートを変更します。今はソメイが終わり、八重の桜が美しく、このあと清々しい新緑の季節となります。この春は森田院長、原田看護部長をはじめ多くの方のご退任やご異動があり、少し寂しい気持ちで始まりました。しかし、前途洋々の研修医諸君や新任スタッフを迎え、共に新たなスタートをきるつもりで気分一新！を思い立つ今日この頃です。

編集委員長 高見 裕子

医事統計 患者数・診療点数の推移

■令和4年度は、月平均入院患者数600人と、病床利用率85%達成に向けて取組んでいきましょう！（令和5年2月現在の暫定値）

外来新患者数は、今年度2月までの実績で22,173名と前年同月までと比べ3,815件の増となっています。今年度も、新紹介患者の確保と逆紹介の推進が重要となります。1日平均外来患者数は、2月までの実績で910.6名と昨年同月までの実績（885.9名）と比較して24.7名の増となっております。

1日平均入院患者数は今年度2月までの実績で573.8名と昨年同月までの実績（550.0名）と比較して23.8名の増となっております。新入院患者数は2月までの実績で昨年度同月までと比較すると732名の増となっております。平均在院日数につきましては、昨年度と比較して0.1日減って12.3日となっております。

入院1人1日当たり診療点数は、今年度2月までの実績で8,181.3点と昨年の実績と比較すると79.6点の増となっています。外来1人1日当たり診療点数については、今年度2月までの実績で3,203.3点と昨年同月までの実績と比較して46.1点の減となっております。

紹介割合は、2月までの実績で92.3%となっており高い割合を維持しています。

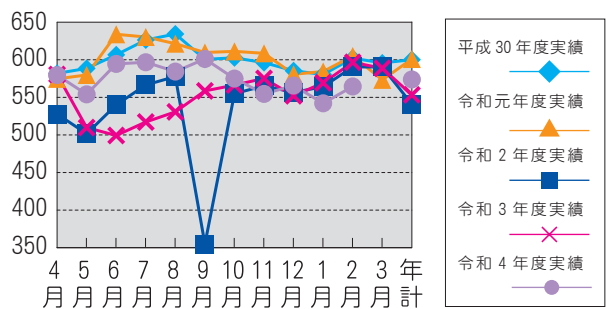
1日平均
入院患者数
(在院)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成30年度実績	581.9	588.5	606.6	626.3	634.3	600.6	602.6	596.2	585.4	580.4	602.1	595.8	600.1
令和元年度実績	574.6	579.8	633.9	630.3	621.4	609.7	611.2	608.6	580.7	584.4	605.0	573.3	601.0
令和2年度実績	527.8	501.6	540.0	566.5	577.7	354.8	555.0	565.3	556.5	564.2	590.5	590.4	540.9
令和3年度実績	580.4	509.8	499.3	517.2	530.7	558.6	566.3	575.2	552.1	569.3	596.6	588.7	553.3
令和4年度実績	579.6	554.0	594.5	596.7	584.3	601.1	575.0	554.6	565.7	542.1	564.5		573.8

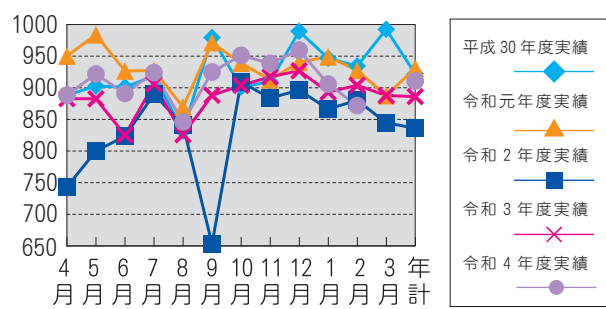
1日平均
外来患者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成30年度実績	888.1	902.8	901.1	918.6	831.7	979.4	901.2	909.6	989.3	946.6	934.5	992.4	922.1
令和元年度実績	950.2	983.9	926.6	927.3	869.6	971.4	938.9	912.7	940.5	948.9	927.7	887.7	931.2
令和2年度実績	743.3	800.1	823.4	889.9	840.8	653.0	909.2	883.6	896.4	866.4	880.2	844.7	836.0
令和3年度実績	882.7	882.6	825.3	906.0	825.7	888.1	903.8	917.2	927.0	893.2	903.9	887.8	886.1
令和4年度実績	888.5	921.7	891.1	924.0	846.1	924.9	951.3	938.6	959.6	905.8	871.9		910.6

入院



外来



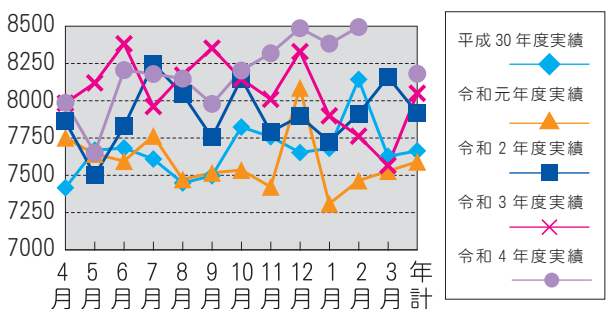
入院
1人1日当り
診療点数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成30年度実績	7,416.3	7,668.2	7,683.2	7,608.8	7,448.6	7,496.7	7,823.6	7,758.6	7,652.4	7,681.2	8,143.1	7,627.6	7,663.8
令和元年度実績	7,752.0	7,642.8	7,595.5	7,764.1	7,472.8	7,516.6	7,535.3	7,422.6	8,086.5	7,309.2	7,464.6	7,528.1	7,590.5
令和2年度実績	7,862.5	7,500.1	7,827.7	8,247.6	8,044.8	7,753.7	8,149.1	7,791.3	7,895.8	7,725.7	7,912.4	8,159.6	7,917.4
令和3年度実績	7,983.7	8,119.7	8,381.9	7,961.4	8,172.2	8,352.7	8,146.2	8,010.4	8,329.4	7,899.1	7,762.5	7,565.7	8,050.3
令和4年度実績	7,986.1	7,650.9	8,205.6	8,179.4	8,148.4	7,979.0	8,202.6	8,318.7	8,486.7	8,383.0	8,494.2		8,181.3

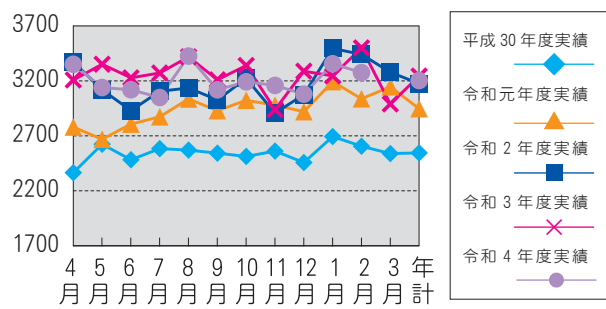
外来
1人1日当り
診療点数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成30年度実績	2,365.1	2,623.8	2,482.6	2,583.8	2,570.3	2,542.5	2,512.8	2,561.2	2,457.2	2,693.5	2,605.6	2,538.8	2,544.8
令和元年度実績	2,780.4	2,669.1	2,806.7	2,873.5	3,035.4	2,929.2	3,023.6	2,978.7	2,920.1	3,193.5	3,037.1	3,146.7	2,947.4
令和2年度実績	3,372.3	3,119.3	2,930.1	3,105.9	3,135.4	3,027.2	3,222.5	2,907.3	3,074.9	3,495.5	3,441.0	3,278.8	3,175.6
令和3年度実績	3,208.4	3,351.9	3,227.9	3,272.2	3,418.7	3,209.9	3,340.1	2,938.5	3,288.3	3,245.5	3,500.6	2,990.2	3,243.9
令和4年度実績	3,351.1	3,139.6	3,119.2	3,049.0	3,425.7	3,118.9	3,191.8	3,158.9	3,079.7	3,356.1	3,275.7		3,203.3

入院



外来



紹介割合
推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和元年度実績	98.6	98.4	98.7	95.6	97.8	96.7	97.6	98.3	100.3	98.2	98.6	94.1	97.8
令和2年度実績	77.7	98.1	96.2	88.4	89.0	90.2	98.4	93.8	97.0	76.4	90.4	97.8	91.5
令和3年度実績	93.9	87.6	96.2	95.8	92.2	92.1	99.3	100.3	101.1	91.0	76.6	94.0	93.6
令和4年度実績	94.9	95.7	97.2	84.3	81.9	94.4	96.1	94.9	87.5	90.0	98.6		92.3

